増補和歌作法

全

へ 4
8167

へ4
8167

<2012-74>

増補和哥作法

兼題并會席廻状之事

一兼題ハ會日以前ニ題者これを出し亭主の儀
にて題二行書て家内會衆へ宛て當日
とり使人の家ごとにもちゆく也
題者ハ兼て其并よりの作家及亭家なり宗匠にて
ハ功者先達の人より出題あるへし
一題を書付より會席へ通志しすへきなり
ハ宗匠の人へ遣すとも回状ハかくのことく様
ありて左のことくあるへし

雪消山文辞

於東何日御命以詠
歌一首捧奉者也

何月何日　何某

命之應究名

又私家地下の会席なとには題を別に書して
四枚を添てかれ是するも有題と短冊とを
かきし又短冊ありても是るかきや短冊に出也

「　寄松祝　　来何日　」

太短冊一枚の中ほとより下てそれ短冊を切すするより
かゝ一枚りそて小つらてつなんへ二つに題を書

「　山花　神祇　　来何日　」

初秋	閏月	閑夜	
朝風	七夕	思恋	来何日

右二首にて題つみ也一首ふたつ但二首ハ短
冊とゝのふれてつみ上に来何日とも書すへし
中ほとより書はしめてかくはの字題右のこと
題て書
下の方
題の短
冊にかす

何月何日　五首歌

早春　朝　冬鶯

めにかきとれて書へし
又懐紙にも書す有
十首本以下九首
小遣へて書へし

風前柳　思忘

述懐

詠草の書様

一　詠草ハ懐紙ニハ違　詠草ハ式なきものなれ(?)
初句より　題を除て二句まて書す三句まです
こと(?)つゞきになりまて書て終句まてつゞくへし

柳辨春色　　實陰上

春のはたる色てみどりをとおくまゆれ
このあろなりき春柳陰哉
そめよ於むめもさくらもはなりねの
色とはるのあとをわれのらと

右のことくにてかゝれすなる書といふと合て書き
るといと書まて奥より竪文の中より書くへし
詞書の端書は紙をよりふれて二行七字に書へし

めいにつゝれて
書くし次第家は
二行なるへし

書つき

夏恋

実陰 上

待まれさるを卯月の

詠字二字とも
書名斗かくく
書あしくる
そうかゝるへし
かくす

名のミしてあかてや右の
かさしふそみる
けしいその影ふかえつゝ
おもひあまりなて夜虫の
この比あふと

こそしのそとしくるを
あはは書くへくして
書へし

懐紙の書法

一懐紙ハ公宴にハ季ノ月詠とかき官位姓名と書
るや私家の会にハ同じ字をかゝれ又晴の会に
あらざれハ季月姓名もかゝねどよろしき書法に
背粗あしくハ宗匠家の懐紙の書法を考へ
見よし地下の者も二条家の御会にハ姓名を
居へ書きれとも其の一流の歌人の同姓かへ
これと姓のみ一姓ハ必墨うすく書くべき法中
ハ季月をかゝれ和歌と和哥和歌と書くかはりに
の人ハ和歌とかく　一首懐紙ハ三行三字と称る

家にては五字に書事や他家ハ一字ハ四字も
三字をと書る事てかきぬ畫多れむつかしき文字を
書へからし

一懐紙の哥とおなじく万葉仮名にかくまじ
其外の人もしかるべし　但四句ありてかくも
よろしかるべし下の句に書名を交て書くしかるを
一字つけても書もあり　一字二字つゝ切る事
かくべきなり

一懐紙の下の字ハそろわぬやうに書べし　墨つきハ
二句三句よ乃至て　あまりは　あまりに墨うすく

さいつきめぐくぬるにかと筆を染て畢焉
墨の色濃薄あるべきなり
一天月氏寺中の為と云ふかふかとおりて
也といへとも九十九三の法にもかなふへく候
すへて中の文字一行のうちに文字一つまいり　又文
字移りの字数法会のかな(?)にかなひ候ハゝ
也

墨つき
さく花の色香も
いあしうらひはのみ
く綴まにうつすへを
ならへて

春日同詠声清有鶯
和歌
正二位源通茂

春日詠鶯入新年詣　和歌

従一位通茂

[illegible]
春をしる里の[illegible]か
[illegible]
[illegible]

秋日詠二首和歌
正三位實陰
林紅葉
くれなゐにまこと深かゑて
いはましや染はなのえ山も
秋のりみちて
名所鶴
らむかすもつきねふの
よろづ代とすさまつ難
和歌の浦鶴

冬日同詠首和歌

左近衛権少将藤原推胤

時雨晴陰

ゆふつくひさすかとみしてうき雲のまよひ一とをりしくれてそゆく

閑窓寒衣

さひしさの秋よりのちは霜かれて風の音さへ庭の荻つゝ

遠帆連浪

おきつなみよりなかなかりてりうはかせみゆる木の葉とそみる

「詠月輝多秋　和歌

正三位雅章」

よを経し影もなれは
なかはしらぬ
千とせのあきを月は
にかはらぬ

右乃外家々の懐紙ハ二枚續七首ハ三枚續九首
く二行七字ニ書へし又十首ハ三枚續ニ書てこれ
も二行七字也但二行ニ書かねる首十首ハ三枚續
ニて二行ニ書へし一説ニ三行七字ニもかく半紙にても
いつれも懐紙ニ書ことはしらくかりて書し紙の
續目と云ところニ事して書へし

あやなくも　隔しのちきりの
きのふよ　きくへらしみの
きれくのりて
續目

一　懐紙認様ニ書きにくうす

七夕の懐紙
七夕同詠牛女
言志　和歌

八月十五夜
八月十五夜同詠
月契千秋　和歌

奉納法楽
春日同侍　住吉寶前
詠百首　和歌

春日同侍　柿本新前
詠寄花　和歌

一 女懐紙のこと

一 女の懐紙ハ落字一字小書付紙ゝ題ゝ名もかゝす

「一首懐紙」

あき風やまねきもやゆる
はなすゝきかな
きゝすに

つゆなうく
さの
野風の
秋の
勢

二番懐中墨摺一番小間

橋ひめのうて乃
あさしもしるゝと
さえこそかすれ袖
さしれうちれの
くかり哉

くみかこしおろ
みとすめけとしらん
むつほうての歌
やゝ江中のこゑ

三十懐帝屋一其よ門し

みくしのやまおくあれ
おや乃うちもつくす
かすかなれ
かは濃とらかて
やまはくらあらね浅
志る色てゆくこと

こ連乃志ら雲　三よ母
おほのゝきいりてみ
うらむ
玉つしまゆくゑも志らて
かは濃ひらり

會席荘厳の事

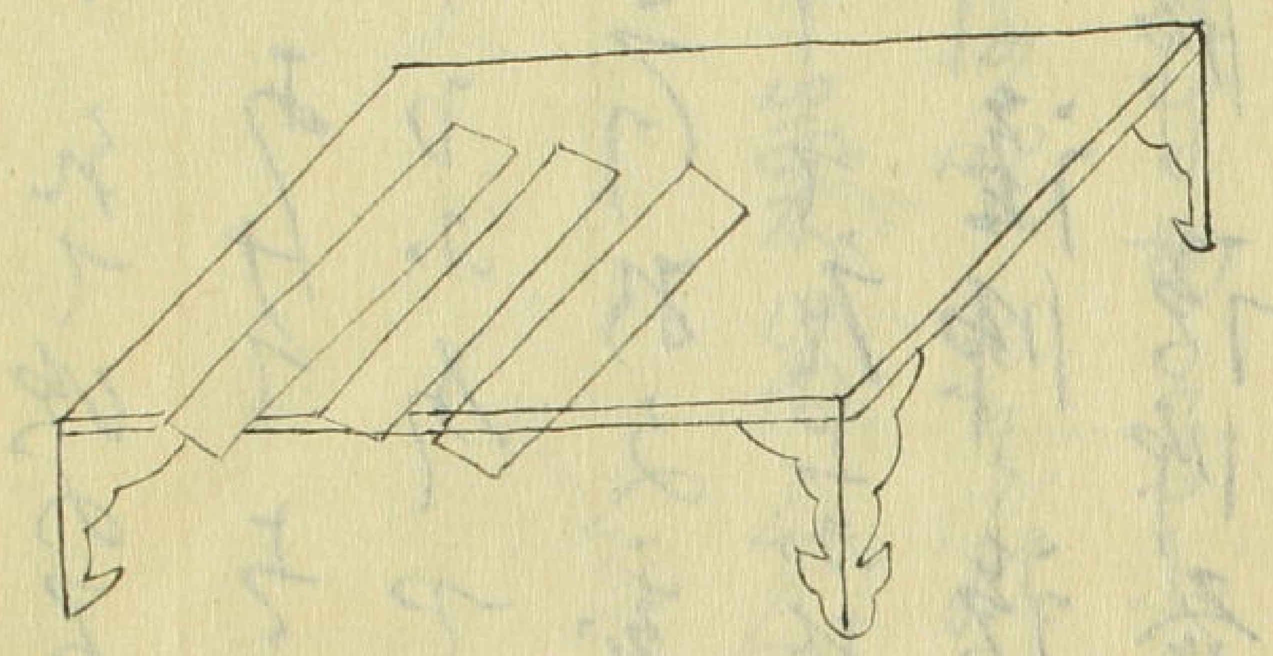
一 會席荘厳ハ床ニ掛物並ニ花瓶ニ花
を立て又香炉香合のうち香之炷ハ和合三種
或樽なの類ハ銘ニ富の物ハ主人か好ミ
奉仰るハ其望ニ従ふ也 此の會の事ハ
二ヶ事 調出何ニても宜 但是一
一 又虚ハ床ニ思ひ中程ニ香炉之文台を掛て
定り候事也 一説ニ竪長ニ又横長ニ寸
云々

會席列座并作法之事

一 連座列座の事ハ凡ハ伍ニて坐席の事
松家香元の左ニ客人あり上座ニ香元一炷花
並ニ添手して座ニつく座ニ銘々懐紙を相
ニ我方ニ取寄て懐中して左右ニ列
座ハ座定りて正客ハ銘紙にそえ香炉を
て香を焼き銘紙を懐中して香炉を廻す也
人よりけしきとして懐中ニより香を
しかして座のすへ向ひて香炉を一座廻て
と見てもれぬとたゝみ左の手にて上をとれ右の
手にてあとをとれ いつれも格別ニ下にゝれ

ふても若しかれ座を静に立てり文臺より
二三尺しりぞきひざまづき膝行座定むとして
文臺の中央か右の方に座して座右に膝退
て神前へ拝して立所歩くふかく右の足を
立て同しく座し懐紙をとり出し人の懐紙を
右の方へ落として付けて文臺に置き下座の懐
紙ハ右より上座の懐紙ハ左にて置也

神前

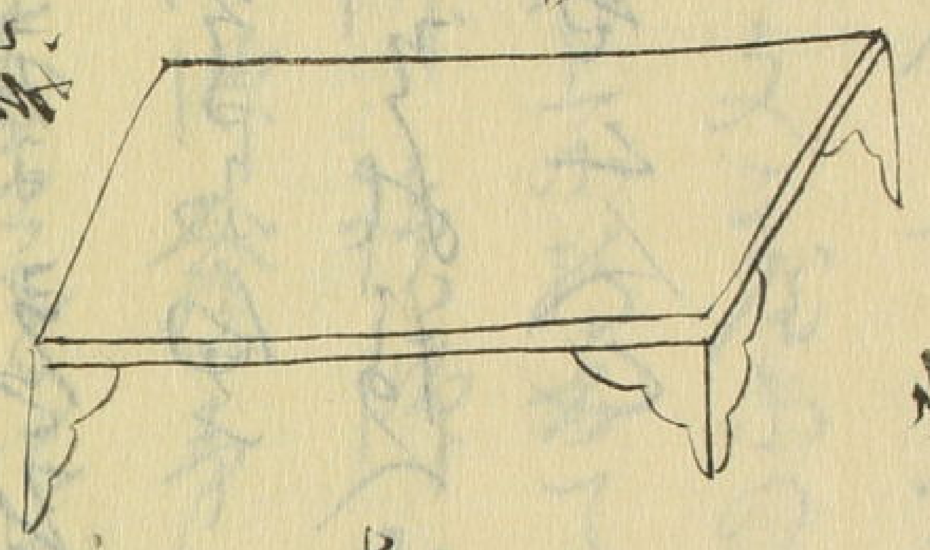


不参の人の懐紙
を奉行文臺の
右の脇に置べし

末座
それより順番に
座へ着く

懐紙上座を並べ奉行座をたち文台
ともに入れて次の間に文台に入れ懐紙ともに文台を
上りあげて上座懐紙上ゐり下座に
懐紙下に入て下に置き表紙を内にゐる
やうに置て文台にのせ守出の紐を向
やうにて座上に指出て並之 懐紙
講師 読師 發聲
一講師読師發聲ありて各々座につき
るなり今日の懐紙を記す先講師出て文台の
右の方に居直し懐紙を文台に置かれ控ふべし

座よりおりて座けて右の膝もとに並發聲出て
文台の右に座す 是に講師文台の前に
着座す前なる紐を向てのこより解きひろ
ろへ様置おきて後へ降執筆あるまで降執れ
筆 華 葉 筆之(?)



読師 赤紙の懐紙より一枚づゝ字面を神前へ向て
文臺の上に置 講師 揚師より前まで講之 發声
歌の文字より發声す 次の七文字より後唱同音
みつるに上座より懐紙まで次第に讀上る
懐紙を講師 右の膝下へ押下 次第に
文臺の間に如此二つ折字を表に神前へ
向て文臺に置て 大概で読師講師發声神
前に移す 満座一同に移すまで讀師 讀師發
声共座に詣す以上 畢すれは 讀師 左 講師ハ 敵之人
發声ハ後に移敵 持所役 敵之 後唱ハ御手ゟより

人数定まり地下までも宗匠のこれをつとめまへし
講師ハ講師のよみあやまりなきやうに心得
有之読師ハ其人数ニ於而毎に宗匠役なり
さしてはわきなり
講師ハ春日同寄道秋にいふる事を顕はす和歌
姓名ハ此の時よりハ披講とはいはず二首三首の懐紙
宗も同し講師我宗は其さし声をひきて講頌
発声並人此以宗匠出来人の詠ハ其宗に一礼して静に
講す発声甲乙口伝有
連歌宗匠を讀させる時ハ礼して其文字道来人の

前はその人の数にまて一礼あるべし

略義

発声並之時は講師ハ〆小て調之
懐紙を文台に置て奉行懐紙を重ねてもとに
かへすまなりそれより講師而て文台の懐中紙
をとらせて下座の懐紙より取て文台の上に
乳あけよみあつめて宗匠にわたし次を二首もよむ
よみてか懐紙をとりて置も又文台の上にてよくのきて
てもよし上座の懐紙まで一よみ終て宗匠ハ一首まて二首
みて文台に置まで前に取り揃へ

懐紙閉やう并裏半紙こと

一 懐紙を閉るに懐半紙ハ表と裏と揃へなり式

久の方を一匁りそろ合ともいり苗状志りく下

より人の懐紙一枚をとまあそろへて得分かそて中

程より左へ一寸七分と閉月の半ほて小刀をさしあ

けり閉紙ハ懐紙の外紙を幅一寸七分に切て苗ゟれ

端を入中程にて折り合かをそりれを又二ゟ折る

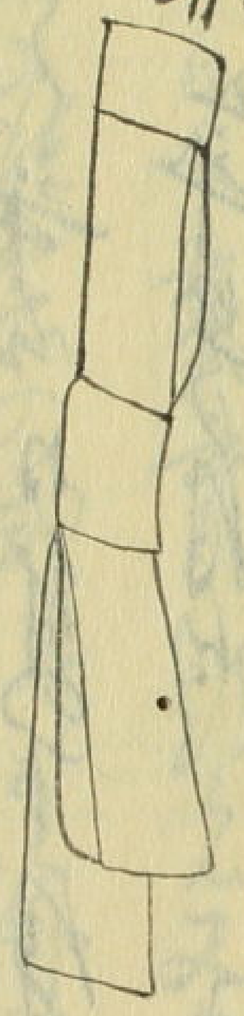
三つのれハ[illegible]に[illegible]て[illegible]それを[illegible]て

[illegible]にむすんて[illegible]て苗ゟれ[illegible]

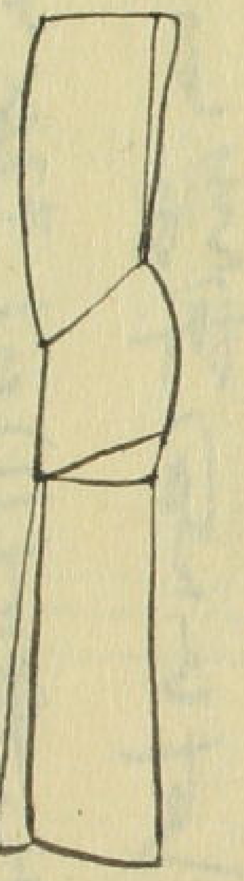
懐紙の下[illegible]関月ハ懐紙の裏に[illegible]閉

枕元のこと法師也二万の懐紙ハ共に閉るなり

表の形



裏の形



かくれとくる法ほるよし

懐半紙裏半ハ志ゟ紙懐紙の端ゟ乃裏の面端ゟり

三寸斗のけて出て紙半紙御合まあたのことし

年号月日　命紙

講師 なにかし

読師 なにかし

発声 なにかし

殊ニ外の云ハなきなし

年号何月日

右かくのごとく年号日付の下月次第ニ書

年号月日　　月次会

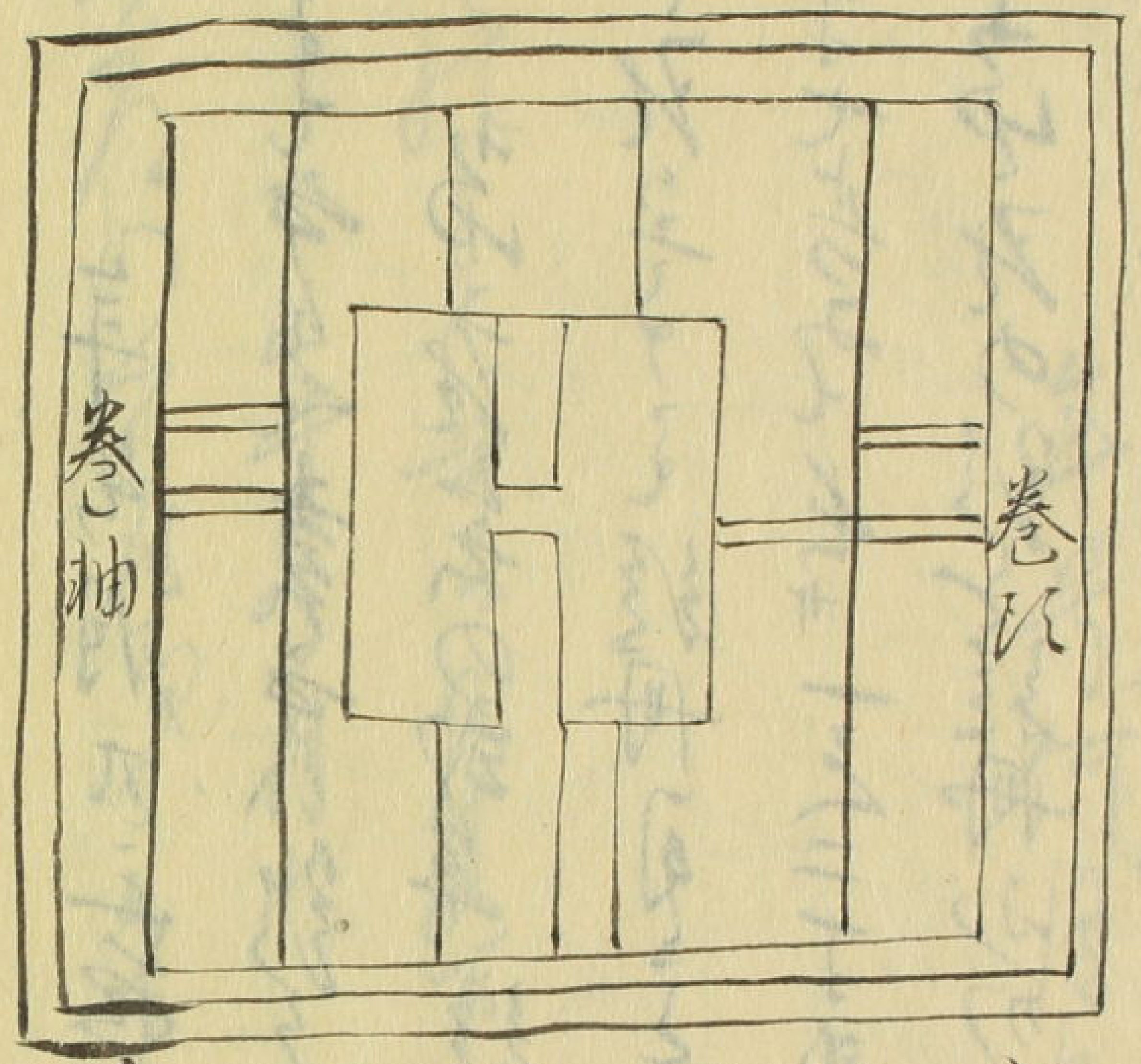
又懐紙の下ニ次第ニ書

年号月次三首会

かやうにも年号之書様ハ懐紙之又ハ短冊の人其人ノ其名の下
　短冊ニ書事の式無　短冊用ニ書事の事
一　短冊ハ寸法も短冊用之寸法　短冊廣サ一寸八分
又ハ一寸七分ニても長サ一尺二寸ヨリ三寸迄ニ至るなり
短冊之短冊の紙を短冊ニかへて表ハ青キを上ニ色紙之
上ハ紫と上ニ書せし裏紙の次第を白紙ニ書付置
奉行の人懐中すべし　紙短冊てハ紙の寸法を間すて
文机ニ硯ニ文て　又文台ニ置る也　短冊ハ表紙
章ニて置之奉行の役人其外ハ重敬の人是ニ在る

其軸ハ二寸ばかり又ハ黄穀の人々に通されの於ゐま
よろへし　硯の蓋のうへに用意に添経け紙に絵紙求
も床の方へむくへし

床
文巻



向の短冊又
懐しハ足
よりなへし

晴の義ならば硯の上に料紙を置き其の上に懐紙以
其上に短冊の外ハ硯のふたに又其上に短冊の外は小短冊を載せて
置へし

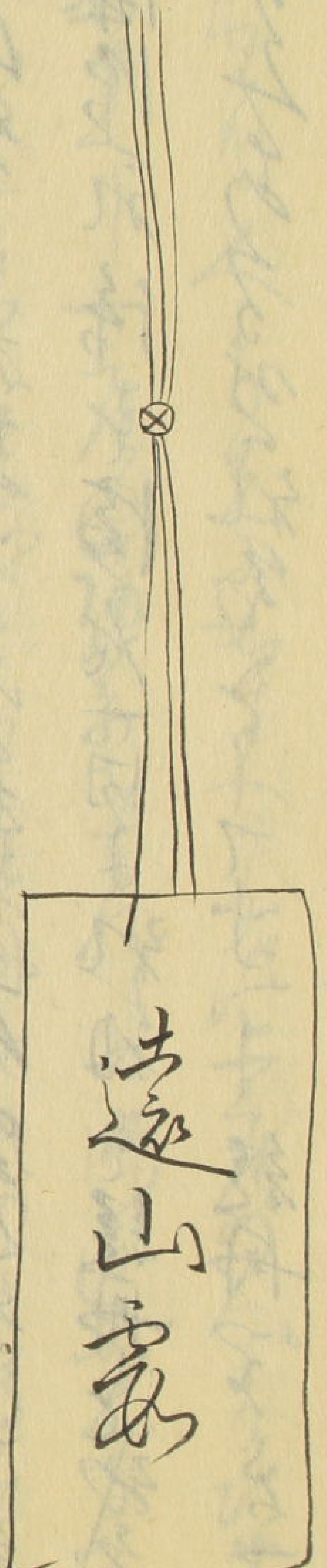
連歌引返の事ハ文台にも向て左方に硯箱を置
乃至ハ亭主人宗匠と出座の事もあれ同座に
よりて引返すへし　懐紙を合に同し　さて上座の人々
次の人に一礼して硯を立て硯筥のふたに懐紙して右の手
にて取て右の方へ　懐中して　懐返し　右座へ
硯箱のふたに入れ持て及びま詠む　あらハれ持ち立へし
短冊をとれば手の短冊をしゆるし　右とし　すへて

五寸程かけ出来候 短冊まて如此みさを出して一統へ
一座短冊を紙て硯の蓋へ取置へし
連衆各帰座の時亭主の人々硯を持出て上座より末
座迄置く 但時宜によりて天方地上座に置 のさ
手前の方におく也 上座より順々に硯の上より取て
次へ渡すへし さて亭主の人懐紙を懐中して取出し
上座の人に渡され之も上座の末座
まて次第に渡し 亭主は二つ折の中の懐紙を二枚を
一座ずつして上へ取れ置て取さて次第にをくへし
二枚なれは一枚は下手にて今一枚は懐中して宗匠の前を

やるり懐紙を出すなり 扨文台の方へ進む時懐紙を横に二つに
折たるを同じ様に畳懐中に入て取へのしを取て懐紙を
文台の下におきのけて立て帰り さて懐中の
短冊をとり出し 折なから紙をとりみするとき短冊を
懐中に入てもよし 又懐紙の間にさしはさみ座人の前に
出すとあれは又懐紙の間にさしはさみ
短冊を懐紙に出して又硯の下に置くとき又硯を直して其の
者前座して向ひ右に坐してその座を立
ちかれよりのもあれは取出し座をすへて各々を
すらし先座より向ひてその座の当座と定く

立座の時は講師に取あへし一句二句にて次人の下の次第
此外の人々も是に准ず人々のうち上座の人より読師
に披講し一座の講師をはしめの師範に見せ奉り
今迄の上は講師短冊をみせ短冊を人々の前の
硯を置て出つ懐紙をよそに置き右の短冊をかへし
出懐紙懐中して是をも別座にて上座より硯のかたはら
に懐紙をして右の下に出て懐中より短冊をとりいだし右の
座へ戻りひろげて名のかたを前に出すにするをもちて硯
のかたはらへ名のかたを硯より出して前にさし出すにまかすを
各をして懐紙出して出座す

講師出て硯の前にすゝみて取りてまた前に出て座す
あるし短冊は字の方を前に向けて右の手に取て短冊
の中程をとりて右の手にてまはし左の
膝を立よみあげよみ終れは又とよみ次に名をよみ終
ふくしとしよみ終て短冊をもとの下に置て次第によし
と言ひよみ終れは懐紙をとりいたしかへして
其のまゝ硯の下に置て座のかたへさし出してまた
講師は座を立て一同に礼ありて短冊を取あげ
よみあげて礼をとりて出べし　短冊をとりて一座
終てよみあげ後に懐中したるにまかす



「短冊の書やう　短冊ハ懐紙の人出之書やう同し

年号何月日　　名乗」

「　　　　　　　　」

短冊之筆法

「題
花　ちるからで春来られ待かな」

「　むかし家の世を遁れん家隠　」

一折目　　一折目

右ハ目録と云定法なり一続よて高位の臣下ハよ
まんとてよみ短冊をそなへて懐紙の短冊ハ
右の方をかしの書やう右家や
小短冊ハ此の短冊を四つにきりてのべるなり
一説長サ九寸广サ口傳あること
短冊ちらしかきハ何と見へ女のうたふあるべしさて

をしへてかにあるへの寸法なる大短冊にてかゝれは
男もちかし 中に調する書法あれとも

「古郷　帰るにし　よもきふの
杉の人いふそはやれ秋の」

「秋夕　書局て　すゑ　夕くれ光廣」

「大短冊ハ幅二寸半長さ一尺ばかり 短冊の上を
あまりおしさげてかくへし」

女の短冊ハ歌にても何にても上の句と一字さけて中
程に名をかくへし 名ハ裏に書 下のことし

「不憑恋　いろのある世のはかなひかりに
まよふやきよし人の心を」

「日　名」

「
女ハ裏に名を書へし 又古今と短冊に書ハ女ハ短
冊にはしるすと一字さけて書之 男ハ古今と短
冊にたゝしるす 有」

「心なき身にもあはれはしられけり　西行法師　鴫たつ沢の秋の夕くれ」

「とりぬよのゆく　さひすれは我身ハうけとありふ　くらさらして人り」

「さくらかりあめはふる　きぬなれのくに　ぬるるもかくれ　なのけふも」

「てのりしむかしへかへる　いろもなし秋のよの月　ひかりなりけれ」

「やちよ君か　いそた　しほの　みつかふと秋すく
とそ　住代すむやと　沖乃しま　君乃え
なく　をいちらり　さして　の　白波う　ふ松」

右のことく短冊に二首も書ならしやうさるなり
小短冊ちらし書
「あはれいかに草葉の　露のこほるらん　秋風たちぬ　宮城野の原」

「色紙の書法

色紙大色紙中色紙小色紙ありて書法数多あり
ちらしやう家々の流も多くありて古来これと定
まる法はなくて只志られしもよし一行の歌あるとも
六歌仙八景なとかくと定めあれは文字とかくにちらされ

此法ハしく半まんさんてあらくふそうらし半とき
あまたん書ク地文字法ともハしく出へき也又月縁とも
色紙ニ書ク行りむ此法ともハしく書ク事ニても
たのしし

此法の外二行
七字二行三字
二行文字書也
是又書名
斗りても書す
かれと是ハ右
書半是すん

「　孤村暮雨
山のはの　くもりし雲も
郡の川色に
かすみ行れ
雨りふるや　」

色紙に書方とまする

「　僧正遍昭　」

「蓮葉のにごりにしまぬ
心もて何かハ露を
玉とあさむく　」

「　在原業平朝臣
月やあらぬ　はるや
むかしの
はるならぬ　わが身
ひとつは
もとの身にして　」

「文屋康秀
吹からに秋の草木の
しほるれはむへ山かせ
をあらしといふらん」

「喜撰法師
わか庵は
みやこのたつみ
しかそすむ
世をうち山と
人はいふなり」

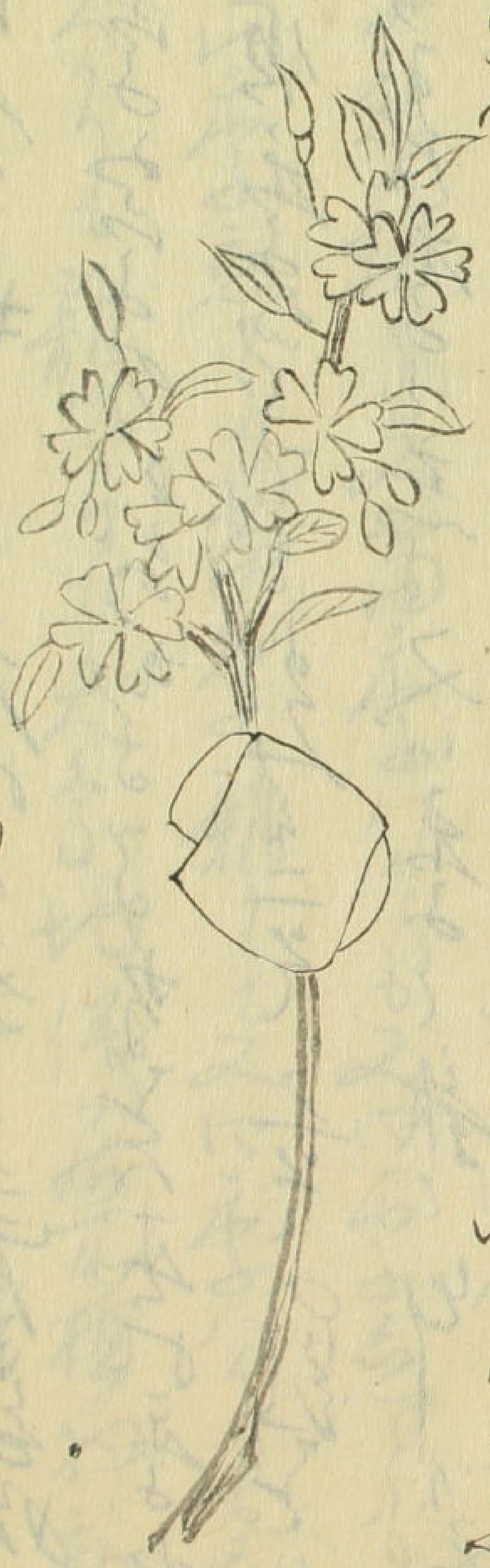
「小野小町
花の色は
うつりにけりな
いたつらに
我身よにふる
なかめせしまに」

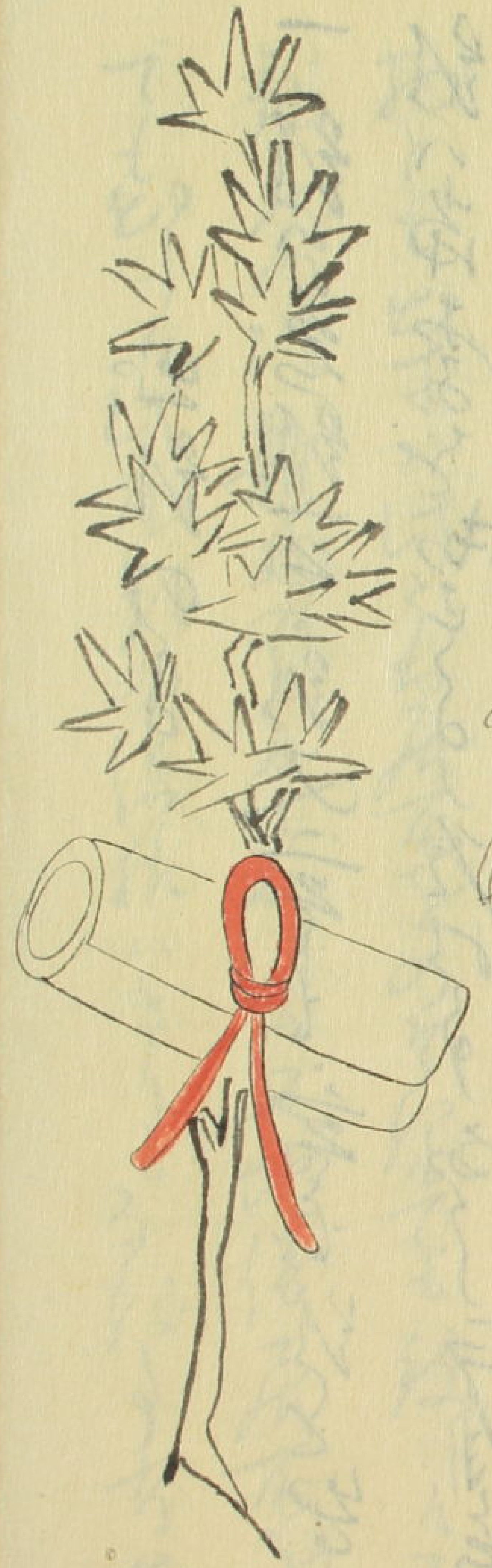
「大伴黒主
かゝみ山
いさたちよりて
見てゆかん
年へぬる身は老やしぬると」

左乃誠をいへとし広て三十六歌仙百人一首色紙等
と当時さかんにおこなはるゝのなし

月花の御興并 草木に付るとつくるより
月花の御興とも本に探題あまたは扇と硯蓋九月も
又草も用ひらるゝ事又花の下なとにてハ硯ふたしよ
をれ枝なとに結ひて上に付のとく短冊をもえらへ
包すまもけりそのおもちれぬさきにならぬようより
無益かることとせんに中に興あるやうにさはなり
又御興のには詠草ぬらす用ひても子らればいらし懐中乃
雑紙と詠草に用ゐらしさてたゝみ方を庭の葉

なとに結ひ付る事もあれとも是れ付ては不興なることなり
一句すへしれとも雲人の歌学者のせふにと縁に付とよみて
遣すもの又の興なれハ又ハ詠草に于てすゝむなるへし
草木の枝なとに付るとなるはすなはちすゝしくらへれはよろしき





出句の事

一 発句并脇第三迄も句を出さずして 一巻
句ハ當季をもつはらにする事也 月花なと別に雑の
句の四字五字の句の加はる事有とも其季に入
事く 但季なくてもよみ二三句の句を用る 十七
にも一巻の内は季の事也 又ハ季を離して出し 季ハ
用ひても句ハ一句の外也 新造れかれの句ハ出の外の並ぶし
る俳の句をハ出されて 宗匠の心得へし 其の句をは
いやしき詞をハ禁すへし つけにても能し 吟
味ても無之事ハ之出来比相山 又なさき事

かくれつけと吟味之ししぬ

但句の口伝

一 句とみえハ当世風なとに但句と出さすに句ん人ありとも
又つきすまし也 はさしきさりとして 四季を離して又
当季を離して又当季ハ有りても又四季を離して四季離
して当季を離して当季離して又四季ハ有りても之ハ有
も離れても離れても天気地儀 居所植物動物離
おもむきハ也 居所とのそれにても致し又居所を
動物の他離れの上にても加へ又地儀居所とのそれに
ても如此の句の但句ハきりしも引く事有之 但句

夏冬ハ春秋のやうにあまりなくて又次にもすくなし
以下のりん恋雑とハ春秋なりともおしハ夏冬なりとも以下
以しハ又恋を春秋なりとも以下雑と夏冬なりとも以下
ハ又恋と夏冬ほとも以下雑と春秋なりとも以下
又よれたりおかしくも以下なるべしこれハ又当季立て
ふてされ季恋雑ともにて詠ハその季なりとも恋雑とも
以下又されまへきなりも
去の時ハ恋月の時ハ月花の時に雪の時ハ雪の句ん
かくも以下ハ恋花ハ句付たり冬ハおもしろき花もと次第
ま以下ハ月雪も句にかなふべし 紛ハ一 天

気己下地儀ハ雑物とハ多く云ふ 雑物とハいふべく
いふ但雑物ハ日月も以上ハ天気とハ日月星
風雲霧雨雪霰露霜稲妻なとの地儀ハ山海
川の流地よあるなり ものなと居所ハ家居
しめるのれ 植物ハ草木動物ハ鳥獣虫の類雑
物ハ玉笹枕衣画櫛糸弓角舟車篠扇笠
蓑なと其外大体器の類分かちてハ末々なしに付ハ
春なそ 夏なそ 秋なそ 冬なそ 恋なそ
雑なそともいふ 又に季 恋雑 分かちてまはし
季もなく 春なそ 夏なそ 秋なそ 冬なそ

恋六首　雑なくて又五十首ハ春十三首　夏七首
秋十三首　冬七首　恋八首　雑八首　又百首には
春廿首　夏十五首　秋廿首　冬十五首　恋十五首
雑十五首　大かた此くて知へし　大方恋の歌物よ書
恋の字を寄恋ハ寄恋の字をすへ　寄恋の字をぬ歌共と
出てよへし　但百首歌は大かたとし　雑を出て恋と
ハ春恋二首　夏恋二首　秋恋二首　冬恋二首とされ
寄恋の歌なくと出て十五首にて今いかなりとも知へし
かゝる有雑の歌も此体なくしかれとも
四季ある八代集の但定歌雑と歩くなるまし文

為家百首并慈鎮百首の歌ハ初字此人好て
詠すへきなり
蒙求追悼此但歌建保ちかく蒙求の字故に
これ百首と一字にて那常して韻字をまもとおもて
するを太詞のうちへラリルレロの文字ハ音あつてハ
有るとて切えの人これと詠すへし　右字の音
を詠せられ詩の句傍文の字文お除すまかく
きしなれとも詞の音を求めす詠すへし平上去入
文字此音をとりて題をくのれいうつもひめやさしく
優なりやうかよふへし

仮名詩幷古人の句題の事

一 かな詩ハ詩と名付て出るものへかなにてよろしく古人
の句のうちに又三代集のうちにある一句と切て出す
をかな詩といふなれとも今ハしるしてあるによく入る
事もよくすれハ出る句の題を似せてもよし
その句古人の句ニ而も今ハむかしの句なれハやすき
能句ニも題又古人の句をや此句なれハ今の
事なれ能句ニも題て句は重而とゆるす
ことハ私と外題ともいへハ古人の句ニハ今様に
まなひ代の句ともいふ古歌の句や此句なれハ今様

二の句に置てもよし 一説ニハ俳諧にても句の頭かへ
句附ハ古人の句をかれ風情かれハ句の頭をかへされ
たるよしなれと

詩文章の句題文題の事

一 詩文章の句を題に出す事 大学中庸論語孟子
毛詩の語なとを題にする事よし 其下
今様の句題ハ人に通せされハ其題の文字をとりて
まなふに及はすとも 第一の志なるへし 初学の人へ出す
ハ年の句春風春の一題なとハ 縁を深くして
題文の題ハ也やし 縁あり 法花経の序

にる使にあれハ二の使者の一節と云すれハかなはんし
くるまへし己其の人よりて一は題文の意かなはぬにてハ
必題の意を出さずして題文の
心題にあらハ初心の者ハ題心のすへて読ぬ候
あるにもさて一ん作ねすを知るやうにてよし
様しるへあしくるべし

題縁の事 條

一 歳内立春 付題集のこれがたし 立春の論ある事
ふるさし又日来まゐる立春とふ題ハ是非のこれと初むる
ことともなり

一 立春ハ春のつけとしての初春の初は春のかすなと
も詠ずる事もなりましきものゝ事題
候これ早春初春ハ春と初の心をよむてし早春初
春とい事ハ古人よみてつゐすときくなり但立春ハ年内
早春初春ハ寸ひとつにて初春の事ハ立春にはけきと
いふ事ハ立春ハ正月にてもなりて早春初
春ハ大概にまきの初れ心をよみてもすみにまかなり
立秋 早秋 初秋のこれも是に同し 新秋も
早秋 初秋にかはりなし
一 残春ハ三月九日まで暮春よりの但此方よりす

如く字体にてあれ 晴るも同じ事にて春の夜に秋の
あはれを残し候にも通し 秋の空に秋 晴秋也又
同じ
一 涼しは初秋に涼しきを詠ずる也 唐詩は小池
残暑退ニ樹ニ涼し 飯をさます也
一 除夜は十二月晦 一日にかぎりて除夜の字は皆
と付る 歳暮は皆除夜の付合也
一 春暖秋冷は必ず秋也 初秋の頃にあり
春秋の入合にてのどかなる也
一 月の名月と同じ 名月は八月に限りてなき

それも又雪月花と云 名月を本とすれば
一 月と云詞に名月あるは名を帰る也 去年の月
のこりの月 十六夜と詠せんとすればこれは名を付る一
首二字の歌にあらば嫌ふ也
一 七夕をとなたにて別し分 古来謡曲なり
と古歌にて織女にかるしと七夕の別にて月なり
七夕とあれば織女とてし
一 雲の雲路 路は雁の路 地はおし鳥なる
一 雨中とも雨露は村雨 夕立 時雨 初とはまた
の雨は 秋の梅雨 しづかなる雨 作とする也

一梅雨ハ五月雨と同し　又梅林実の色つく比の雨と
いふ也やしまみつかるよしといふのみす
一月前雨月後と同し　秋の説に従ひ出せる者
又秋時ハ秋の霧秋の雪ともいふへし夏雨同し
一藤れ富士山ハ同し　映れ古来遠望紫花時月
なとにてもしあるへし　一瀬の説のよしとかくし
是て候まへきなり
一浮水といふは浮　澗水なとの歌にかふへしとある
又松浮浪水と云ハ繪なとにもれ雅て見へし
一汁と二条家ニハ十キサ冷泉家ニハニキハト別流と

二条家ニハニキハト冷泉家ニハ十キサト訓よりて
汁と出する歌にハ定家二条家の弁ニなきさゝよ
むるといふ説あり　昔人これさこなかりしなり
古人ハ清汁の歌ニみきもとも　なきさいとも大かう
みえくるなるへし

遊義門院

名取汁あしかりかひやもろりんは清きなかさゝ
いせれ海のよし

汁弁　汁の説ハなきさとも　あらはそ此よりなれ説て出き
しるものや

一志賀山越ハ広沢眺にもとにも山家ハ必志賀へは
もとよみ広沢ハ月と添すへし
一さか野ハ冬の野のさに作ともあり杉嵯峨ハ冬ニ不
ふつけてのす之
一京より山家ハ春日の京ニ近隣の京ニ不付すや
又野より山家ハ付るへし但京嵯峨と引ては京へ
付りん又京隣の京とよみて野の秋深くは付るあり
一水流海辺ハ寄せ之海辺ハ海上舟渡ニ付る水流
ハ河舟ともいふへし
一隣家ハ流水の山家をも隣家ハ流水ニ付る也

一里と村はなへてなき里の一村なとに無いつれも付る
在所ニ古寺村も付へし
一水ハ河つかの里之さ流水寺院なとにも付へし
但深山の名所なとハ無之の寸
一山居ハ山住する山里ハ山かけ家居ハ山里ハ林麓乃
里ニも付るへし山家ハ山亭山彼にも付るへし山彼ハ
かけし大方之紀もならぬは山亭山彼すれとも左右ある
へとあり
一田家ハ田中田畠の広き庭と遊戯[illegible]
[illegible]田里ハ田舎との[illegible]

四方ふは竹に一句四方に似合とハきらひ候

一 野亭 野宿と申候ハ野の家也 野宿ハ旅宿

又一於嫌ひ候也

一 竹亭ハ竹有家也 竹のうへに竹の多く有所をもいへ

小家の竹林に 数竹林ハ竹の一むらをいふへし 竹亭と

申すへからす 高くすくなきものなれ

一 柳と庭ハ同し 柳と申す事も 庭と斗よみ候事

可有之

一 高木と申候ハ 松風なとよみてハ風の方に似合すして

木のなし候ふ事中へかくれて 一句の事ろえ候なり

てたしかす

一 梅といふ字ハ心なくてよみて 梅といふ字ハ梅

とまいらせ候へし

一 花といふに花の花とよみては花のことにあらす 花の

数有 十句まてはくるしからす

一 栽花といふハ植たる花にてもよくへく候へて

落花をこのむ 竹に依 植たる花の字也

一 雲[illegible]霞霧雲花落雲[illegible]に霞雲露と花

よみては斗雨て竹の上霞中雨霞 陰雲と申す

ハ雨霞とみ遠へし 雲月等雲 みなと申すへし

茜雲茜霞とはよむへし
一 飛花と出すれハ春の桜とよむ也 秋の紅葉ニ
飛花といふ事ハ花とよみ候へとも也 但別ニ飛雪申て
雪なとにも飛花と申す也 紅葉にも申
の紅葉は落葉なるへし
一 花文様 雲の月ハ文間の字にんと合すへし
一 新樹に限るとよりも出すれハ
一 紅葉に黄葉に薄紅葉トモ 紅葉之 但しと代 黄葉にて
落紅葉なとよめ候ヘハ 下葉にもはやくちに黄葉ふとけり

一 下葉は錦紫にはよまず 錦紫の秋也
一 野菊は白ひなみ候へとも 香菊は紫 錦にて候に
一 菱ハ池にも庭にも茎ありと申すと 水草ならと在
とも有
一 昨今ハ古人集の三宮凡一所に 侍る人多き公
但一説にてもよむ事ハ可然に及ぶ
一 郭公鶯 郭公ふかれず 鶯とふハみなみ未也
一 羇中旅宿の人まて古き旅又り許
なとも也へし 旅宿ハ山地の名也 旅泊ハ必
海辺舟にて泊の名なり

一 行客ハ人旅人にてもいれ通る人にまけさし
一 和意ハいやといひ出ぬさまなりし
一 思不意ハ人ニ不悟思ひて人有とてものけ之意なふ
ん事也
一 慢怙意 言出意 和不意 同し
一 久意 強き意 不恵意之旧意ハ無不遂意なり
一 名立意ハ無益なり
一 笑意我人笑ふ意の外ニて 笑意笑ふ之笑意
ハ我人といはれ無益也 堅意ハ佛祖より
てらかす也

一 不憑意ハ人のちからと頼みおもふ人の気ぬま
ことわりハ家人をたのまぬさまなりし
一 疑意ハ人の心をうたがひけあやしみなどもあり
一 厭意ハ人ニいとひ嫌ふ之
一 歎意ハ無益て候も
一 恨み意ハ恨みいふ之 恨る人をもよみ
一 恨 強意ハうらみをよそに中の強也
一 忘意ハ人をわすれし 彼意と同し
一 無不遇意ハ無益不遇人をそ 強意の心をつけふ
ある事情も 強て情ハ二句無益之と 可有之候く

一 竪恋ハ人の恋と心と分るまじあれば恋と人の
とりなし

一 相恋 恋相 久恋 恋人の類也 忍恋 片相恋
久恋ハ 家相人のことをいへる也 恋相又ハ 片
相思久と同し 相人のことと引わけ 付るなり
又作 相恋の事 恋 の題に付てハ 各々見て
同し

一 海恋 恋ハ 海辺の事と 懸けてよせて 前後恋
ハ海の事にも付るなり

一 慶恋 絶恋 旧恋 後恋 不逢恋 なと皆同し類也

一 久恋 経年恋 名立恋 関恋 見恋 初恋ハみな不
季也

一 春恋 秋恋 恋 雑として 四季に分る 恋ハ
去なれば 春の 類の内と 老てもしよし 雑も
みのりまへよりも 春かれども 雑ハ 花も 此 恋の 歌にも
よせて 見るべし 雑ハ 大体 此 心 なるべし 中よ
むへし 初心の人ハ 花にも恋の 歌も なし 此 心
と 能々 心をつくしとぞ

そのすへて詠出しをのれに敷き絶えては
して十二首と十一首とを合せて詠出す
三十首をとりとりに定め後人の考をさたむると
いふなり
夏秋冬の下
寄月一首
日を經て月に似けり

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]